200歳 万歳！

200歳まで生きる会 H十九年一月 第八号

「光の水」の話

新年あけましておめでとうございます。

NPO法人「光の水」の谷さんの話を聞きました。谷さんは、医師から大腸ガンだと言われ、余命三か月と言い渡されました。すぐ入院を言い渡され、三日目から食事は進行するからダメ、と点滴を打たれ始めました。そして、早速、大腸が切り取られました。

今は検査の結果、ガンは消滅していることがわかりました。実は谷さんは二年前から「光の水」を飲んでいて、そのためガンが消えていたのです。谷さんは「光の水」はとても良いので、みなさんにお勧めしたいと思っている、ということでした。

谷さんの飲んでいる「光の水」というのは、実は重水素が121ppmの減少水であることが水質検査により分かっています。そして重水素減少水には、ガンを死滅させる働きがあることも分かっています。重水素減少水については、「200歳　万歳！」の創刊号に紹介していますが、やはり重水素減少水には、すごい効果があったのです。

「光の水」は、実は家庭でできるのです。ただし、量子エネルギーを発して、普通の水を「光の水」に変えるという「カンタム」という転写機が必要です。「カンタム」によって「光の水」に変えられると、その水はクラスターが三分の一になり、かつ非常に高度なエネルギー水に変わります。

この水をわずかペットボトルのキャップ三杯、50リットルの水に混ぜて蒔くと、栽培される農作物が、成長の姿をまるきり変えてしまいます。巨大農作物ができるのです。例えば、キャベツが新聞の見開き二ページいっぱいを占めるような巨大キャベツになります。（図参照）キャベツは栄養を土壌から吸収して大きくなります。その時、水のクラスターを小さくすれば栄養の吸収が良くなるので、作物が大きくなるわけです。

栄養の吸収を良くするだけではありません。「光の水」は、農薬の原子の分解をしてしまい、全ての農薬の害を消してしまう働きがあるのです。農薬のかかった中国からの農作物をこの水につけると、農薬の害が消えてしまうことが、検査の結果証明されています。

加えてこの「光の水」を使って育てた農作物は、品質が良くなり、味が良くなります。そこで、この水で育った巨大キャベツは「うちにくれ」「うちにくれ」と、お好み焼きをする商売人からは大歓迎され、味は良く、安いし、芯まで全て食べられるというので、すぐ売切れてしまうそうです。

ハウスイチゴの話をしましょう。イチゴは九月から三月の間ハウスで栽培され、その間に五回収穫があります。ただし、この水を蒔くとなんと収穫は六回になります。ただし、大きさが倍になり、イチゴがあまり大きくなりすぎると、少し敬遠される傾向があるので、その点が少し問題です。

福岡県の萩町では柿の栽培に「光の水」が使われているということです。するととても美味しい柿が採れ、一個1，500円で東京の料亭などで買ってくれるので、一般販売は止めて、特殊な売り方をしています。

「光の水」の重水素濃度が農作物にすごくよく働き、作物を巨大にする働きがあるわけです。でも農作物が巨大になると、このような心配が必要になるわけです。

でも「光の水」を使うと、農作物に害虫の心配がなくなります。何故なのか分かりません。実は虫が好むのは少し弱った野菜で、生命力の強い野菜には虫が付かないのです。多分「光の水」を使うと、野菜の生命力が高まるので、虫が付かないのでしょう。

稲作に使うと、一反の土地から八～十俵採れるのが普通だそうですが、「光の水」を使うと十三俵採れ、肥料はとても少なくて済むそうです。

人間が飲むと血液の浄化作用があり、この水で薬を飲むと、効果は三倍も良くなるそうです。例えば、バファリンをこの水で飲むととてもよく効くそうです。ただし、「光の水」には泣きどころがあって、手術前にこの水を飲むと、麻酔が効かないそうです。納豆にかけるとダメ、ということがあるそうです。

NPO法人「光の水」では、この水の普及を考えているそうですが、農協に話を持っていくと農作物が大きくなりすぎて規格外になって売れなくなるし、肥料は七分の一で済むとなると、肥料が売れなくなるなどの結果になるので、取り入れにくいなどのことがあり、世の中にうまく認知されないので普及が難しく、誰か力のある人が力を貸してもらえないだろうか、という話でした。とてもおもしろいお話でした。

※NPO法人（「地球と人類の生命を守る会」光の水）の連絡先。

○TEL　03-5361-6067（企画室の谷さんに通じます。）

○会長の吉田さんの携帯電話番号090-2486-3105

七田　眞（しちだ　まこと）

1929年生まれ。島根県出身。教育学博士。心理学博士。USアカデミー・アカデミシャン。日本文化振興会副会長、日本サイ科学会顧問。七田チャイルドアカデミー校長。しちだ・教育研究所会長。現在、七田式幼児教育を実践している教室が全国で約450教室を数え、アメリカ、韓国、台湾、シンガポール、マレーシアにも七田式教育論が広がっている。

特集記事

「100歳までは現役で」

人間の体の機能と意識は実はセットになっているのです。老化を急速に招くのは自分の意識です。人間の体には想像以上の回復機能があり、時間のねじを巻き戻して取戻しができるのです。意識さえ上手に使えば、人間の体には本来120歳まで生きられるように、DNAがプログラムされているのです。

大切なのは知識と経験を組み合わせて上手に使いこなす能力です。これを**結晶性の機能**と言います。

人間は**動作性の機能**と、**結晶性の機能**があり、この2つについて理解を深めることが大切です。

動作性の機能は加齢と共に衰えが見られ、ある日突然身体機能の衰えを自覚します。そこから普通、急速に老化が始まります。衰えたなという意識が想像以上に心身にダメージを与えるのです。老化したな、と意識をするために、その進行を進めていく結果になるのです。ところが意識を上手に使うと、意識に機能を低下させる働きがあるのです。

一方の**結晶性の機能**は年をとるほど高まります。老いは完成の姿でより高度に、より美しくなるものです。年とともに増えていく知識と経験を組み合わせることによって、人はますます脳の働きをよくしていき、老化を遅らせていくことができるのです。

動作性の機能と結晶性の機能は、ちょうど反対側にあると言えるでしょう。

人間の脳は大脳、小脳、脳幹から成ります。その内、大脳は90%で、そのまた30%が前頭前野です。ここをいかに使うかが問題です。

最近は光トフォグラフィーを使って、今どこが働いているのか、頭の働きが目で見えるようになりました。

子どもがテレビゲームをしている時と、おじいさんが子どもに向き合って絵本を読んで聞かせている時とでは、どちらが前頭前野がよく働いているでしょう。実はおじいさんが音読をしているほうがよく働いているのです。

大脳は大脳皮質の外側の灰白質と内側の白質から成っていて、年を取ると外側の灰白質の働きが失われていきます。一方白質は良く使われると、年とともに増えていくのです。頭の良し悪しは、白質の神経細胞同士のつながりあいが良いか悪いかで決まります。頭をよく使うほど神経繊維の束の太さ（コラム）が増し、頭の働きをよくしていきます。

年とともにこのコラムが増えていき、頭の使い方がたくみになります。これが結晶性の機能です。

認知症は一旦進行が始まると、その進行が止まらないと思われてきました。ところが毎日音読を続けると、認知症の進行は止まるだけではなく、使えば使うほど結晶化の機能が増加することが科学的に証明されたのです。

1987年にノーベル賞を受賞した利根川進博士は、これまでの「生殖細胞が体細胞に変化する発生分化過程で、遺伝子情報は変化しない」という従来の考えを打ち破り、変化するという発見に対してノーベル賞を受賞されました。DNAは、人間の一生のうちで定まっていて、変化しない、獲得形質は伝わらないという考えに、利根川博士は終始符をうったのです。

20歳のDNAと30歳のDNAでは違うのです。

すると、父親が20歳代で生まれた子どもと、30歳代で生まれた子どもに親から遺伝で伝わるものは変わってくるのです。だから、50歳代の父親から生まれた子どもが、とても賢いというようなことが起こります。

さて、老化にはもう1つの考えなくてはならない点があります。人間は更年期に身体に2つの変化が生じます。1つは免疫力の低下、もう1つは

代謝機能の低下です。この2つによって老化が進んでいくのです。

このうち免疫力の低下を招くのは、９０％過食によると言われています。粗食がよいのです。高タンパク、高脂肪の食生活は４０代後半から止めるようにして粗食に切り替えましょう。

代謝機能は、実は水を飲むことで向上する事が分かっています。

免疫と代謝とが生命の基本で、粗食とたっぷりよい水を飲むことが長寿の条件なのです。

生命があるということは、身体が腐らないことです。免疫と代謝がよく働けば、人体は腐らず、長生きができるのです。

人間の体の主成分は水です。平均７０％が水分であることは、よく知られています。その水の滞りない循環が生命の源泉です。

慶応大学医学部の坪田一男さんは「１００歳まで生きる『不老！』の方法」（宝島社）で、若返り作戦としてたっぷり水を飲むと若返ると説いています。1日の水の必要量は体重の３０分の1。体重６０キロの人で、1日約2リットルです。

Ｄｒ．バットマン・ゲリーニは「９０数％の病気は、水を飲むことで治癒できる」と説いています。水に思わぬ効果があるのです。と言っても水道水ではいけません。還元水などよい水であることが条件です。

「長生きさせる水」（すばる書房新社）を書いた篠原秀隆医学博士も、水でほとんどの病気が治ると水治療を説いておられる先生です。糖尿病、腎臓病、関節リュウマチ、慢性肝炎、高脂血症、高血圧症、アトピー性皮膚炎、気管支喘息、不眠症、自律神経失調症、メニエル氏病、癌、脳梗塞、ウィルソン病などがよくなることをこの本に書いておられ、1日に2リットル、朝起きがけに1リットルの電気分解式アルカリイオン水を飲むことを薦めておられます。水で人間クリーニングができるのです。水を飲むことで、腸内の掃除が日々行なわれ、腸内の腐敗を防ぐことができるのです。

病気になる原因は、腸内の異常発酵で、過食によって、人は腸内の善玉の細菌を死滅させていくからです。高タンパク、高脂肪の過食によって腸内に腐敗が起こり、それによって人は病気を作り出していくのです。

だから、もし腸内細菌を元気にすると、健康が回復されます。そのための腸内細菌を元気にする最も良い方法が水と断食だと言われるのです。断食は、腸内細菌を理想的なバランスで再編成し、善玉細菌の住む腸に変化するのです。

人は活性酸素により病気になると言われていますが、活性酸素の９０％が腸内の異常発酵によると言われていることを知らなくてはなりません。

今、大腸がんが増えていますが、その原因は高タンパク、高脂肪の食事にあることを知って、粗食につとめましょう。

長生き物語

世界三大長寿村というのがあります。その第一に挙げられるのがパキスタンのフンザ、それからソビエトのカフカス（コーカサス）、南米エクアドルのヴィルカバンバです。カフカスとヴィルカバンバについては既に書きましたので、今回はフンザの番です。

フンザはパキスタンの北端、中国とロシアの国境に接している地方にあります。ここは山々に囲まれた地方で、山々の高さは6，０００メートルを超えており、中には7，７８８メートルにも達するラカポシ山もあります。

そういう山々に囲まれたフンザは、過去2，０００年間外界との接触が無く、人口は1万人～3万人で推移していて、１９２０年イギリスの栄養学者ロバート・マカリソン博士によって紹介されるまで、あまり世に知られていませんでした。

マカリソン博士が、「ここの住人の間には、胃潰瘍、ガン、細菌性大腸炎、結核の患者など一人もいない。１００歳以上の住人が驚くほど多い」と医学雑誌に発表して以来、一躍フンザは脚光を浴びることになりました。

ここは、岩の塁壁に囲まれていて、外界と結ぶ唯一の交通路は、フンザの谷を取り囲む、切り

立った岩壁から突き出た山あいのうねった道で、20度~30度の勾配があり、時には擦り切れたロープの端もある、という岩だらけの道です。

そういう岩だらけの道をここに住む100歳を超す住人たちはすいすいと登って行きます。外界から来た調査隊の人々は、少し歩いては呼吸を整え心臓の鼓動を鎮めなくてはならないというのに、ポーターとして雇った老人は写真機材の入った重い箱を担いで、息も切らさずに険しい地形をすいすい登って行くのです。

マカリソン博士は言います。「ここの住人たちは総じて素晴らしい体格をし、病気にもかからない。老いも若きも活気に溢れ、耐久力があり、年を取っても若さを保っている。多産で長寿で、極めて安定した神経系統を授かっている。」

フンザの住人は極めて高齢の者でも、老眼がなく高齢者がかかりやすい目の病気や視力の低下が起きていないのです。多くの高齢者が仕事を続け、文明国で見られる老衰の兆候が全く見られないのです。

この村の人々の長寿の秘密は肥沃な土地にある、と見られています。フンザの人々は2,000年を越える年月をかけて、厳しい労働により谷に広がる肥沃な段々畑を作り、山の小川や川から引いた水の流れを定期的に変えるために、優れた灌漑システムを構築してきたのです。住人がどうやってこれほどの最高水準の技術を使った灌漑システムを持つ畑を、数千枚も作れたのか、世界の七不思議に挙げてもいいほどの偉業だといわれているほどなのです。

フンザの住人の人たちは何を食べているのでしょう。その多くは果実です。果物の中で彼らが一番食べるのは、名物のアンズです。ここにあるアンズは20種類以上もあり、それらの味や栄養価は非常に高く、フンザのアンズは地球上最も美味な果物、と言われるほどです。冬場のフンザの典型的な朝食は、乾燥アンズとキビのオートミル粥に、挽いたばかりの亜麻の種を振りかけた物です。

フンザには牧草地に適した土地がほとんどないので、畜産はほとんど不可能です。そのため、フンザの住人たちはヴィルカバンバやアブハズ(コーカサス)の住人たちと同じようにほとんど肉を食べません。食事における植物の割合は、99%、動物の割合はわずか1%です。塩分の摂取は少なく、砂糖の摂取は0、加工食品の摂取も0、肥満の発生率も従って0です。成人男性の一日のカロリー摂取量は1,900カロリー。そのような低カロリーで非常に健康なのです。

フンザの住人の長寿の秘密は肥沃な土地にあるのです。彼らは何世紀もの間、完全な有機農業を営んできました。肥料や殺虫剤など手に入らなかったからです。パキスタン政府がフンザの村の人たちに、昆虫の大量発生が予想され、穀物に被害が出る恐れがあるので殺虫剤を使うように、と勧めましたが、フンザの指導者は使わないことを決め、代わりに調理用の薪の燃えカスを集めて、植物の周りで昆虫が降りてきそうな場所にまきました。強いアルカリ性の木の灰は昆虫を寄せ付けませんでした。

その後、灰は土に溶け込み、ミネラルの成分で土壌をさらに豊かにしました。

ある時、セールスマンが収穫が増えるからと、合成肥料を使わせようとしたことがあります。フンザの住人たちは、合成肥料を使うとより多くの水を必要とし収穫高は上がっても穀物の質が落ちたので、有機農法に戻り、以来合成肥料は一切使わない農法に戻りました。肥料は人間の排泄物を肥料とする安全な方法をあみ出して、土壌を豊かにし続けているのです。

ここの住人たちは、とても友好的で、調査隊が入っていくと村人が両手で握手してきます。子どもたちは調査隊の人たちにあげようと果物畑に走り、アンズを取って来るか野生の花やりんごを差し出します。家族がお互いを大切にし、みんな幸せそうです。

フンザの老人たちは働き者で、100歳でも畑仕事をしています。108歳になるカルベ・アリーは耳も目も達者で、畑仕事は全て自分で行なっています。20~40キロの物なら平気で背

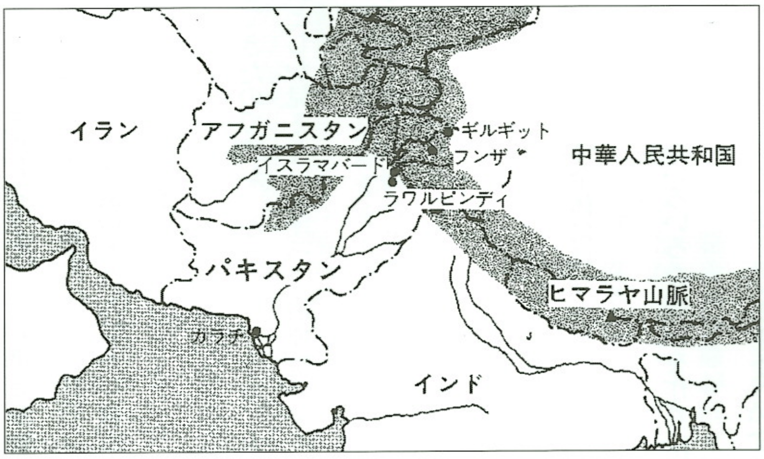
負って山を登ります。グラーム・サルバールさんは105歳。4回結婚しています。4度目の今の奥さんとは15年前に一緒になりました。奥さんは30歳。そのときの奥さんの歳は15歳。爺さんは毎日15歳の娘を口説き続け、娘は90歳の情熱に負けて一緒になったということです。奥さんは小さな赤ちゃんを抱いていて、それはグラーム爺さんの孫だと思っていたら、なんと爺さんの息子だったのです。若い奥さんとの間に3歳、5歳、7歳、9歳、13歳の5人の息子がいたのです。グラーム爺さん曰く、「これからもまだまだ何人でも子どもを作るつもりだ」。グラーム爺さんの最高血圧130、最低血圧80、脈拍は64。青年並みの健康状態でした。夫婦円満の秘訣は夫婦譲り合って暮らすこと、だそうです。105歳でなお家族の中心である、全く老人を感じさせませんでした。

フンザのお婆さんたちの話もしましょう。105歳のスルターン婆さんはふっくらとした顔立ちで、歯はまだほとんど抜けておらず、目も耳もしっかりしている。庭掃除や家の中の仕事は何でもしている、という元気お婆さんです。

ザイナブ・ビビ婆さんは、105歳。小柄で息子たちと一緒に住み、孫の世話、庭掃除、網物、食事など日課にしています。目や耳は達者、今でも針に糸を通すことができます。息子が4人、娘が1人、孫は18人、結婚したのは15歳だったそうです。ザイナブ婆さんのことば「私は今までに楽しみとか苦しみを感じたことはありません。子どもや親戚が面倒をよく見てくれます。若い頃の付き合いが多く、今でもその付き合いが続いています。人生を楽しむことが私を今まで長生きさせてくれました。」一言の愚痴もこぼさず、むしろ人を思いやるお婆さんでした。

（年齢はすべて取材当時の年齢です。）

フンザ



100歳まで元気に生きる　アスペクト
長生きの秘密　日本テレビ　より

アンチエイジング講座

塩の話

塩分不足が病気を引き起こす

塩分は控えましょう。というのが常識です。これは厚生省や医学関係者が塩分の摂り過ぎが病気の元になると説くので、今ではすっかり常識化してしまっていますが、実はこれが逆に病人を増やしていることに気がつかなくてはいけません。

化学精製塩は確かに悪いのです。そうではなくて、自然塩を摂ることが重要なのです。塩化ナトリウムという化学精製塩が病気を引き起こすのです。逆に自然塩は摂らないと病気を引き起こします。体の塩分不足でいろいろな病気が起きます。腰痛、うつ、認知症（ぼけ症状）、おねしょなど、塩を摂ると急速に良くなります。

人間の血液は、海水の構成元素と配分がほぼ等しいのです。つまり血液と海水とでは、濃度は違いますがミネラル・バランスはほとんど同じなのです。病気を作る根本原因は、実はこの体内環境のミネラル・バランスの乱れにあるのです。

その体内ミネラル・バランスの乱れを修復すれば病気は治り、それを治すのは海水が一番適していると唱えた医師がいます。医師の名は、ルネ・カントン。海水こそ最強の免疫。完全なミネラル・バランスだけが治癒力を促進する、とカントンは唱えました。フ

ランス科学アカデミーで1904年に発表した海洋療法（タッソテラピー）の誕生です。

カントンは小児コレラにかかった瀕死の多くの子どもたちの患者に、濃度を薄めた海の水を飲ませました。子どもたちは次々に蘇りました。また腸チフスの末期の患者で、他の医師たちが、その日のうちに死ぬ、と言われていた患者に、大量の海水の静脈注射をしました。すると、患者は意識を取り戻し、蘇りました。一両日中に死ぬ、といわれた肝硬変の重症の患者に海水の皮下注射をすると、患者は二週間で退院しました。

これらの発表でルネ・カントンの海水療法は一躍有名になりました。海水療法こそ最強の免疫療法だといわれたものです。

現代病の増加は実は塩不足で免疫力が低下したのが原因です。塩を摂り、体内のミネラル・バランスの良い人はガンにはならない。ガン患者が塩を摂れば、抗がん剤の副作用を抑えることができる、といわれています。

塩を摂って認知症（ボケ症状）が治った

寝たきりでボケ症状の90歳のFさんに、健やか治療院の福迫先生は、だまされたと思って減塩食は止めて普通食に切り替え、濃い目の味噌汁を摂らせ、ご飯には必ずごま塩をふりかけ、自然塩でつけられた梅干を一個毎食欠かさず食べさせ、漬物には醤油をかけ、お茶には塩を一つまみ入れて飲ませるように、と家人に指示しました。するとどうでしょう。三日目の朝、寝たきりだったお母さんが、なんと起きて居間のこたつにあたっていたのです。それきり寝込むことがなくなり、ボケ症状も消えて、二年後に大往生を遂げるまで、その間ボケ症状は全くありませんでした。

福迫先生はまた68歳のYさんにも、減塩療法を止めて塩を摂るようにアドバイスしました。Yさんは塩分を控えなさい、という病院の指示に従った食事をしてきたのですが、なんと、どうみても80歳の老女としか見えない状態で、治療院に来られたのです。

聞くと、家の近くが海だというので、福迫先生は朝一番の汲みたての海水を水で割って、猪口一杯毎朝飲むように、とアドバイスしました。するとどうでしょう。一か月後、顔のシワはなくなり、つやが出て、肌はピカピカ、体全体にはりが出て、若々しくなりました。

このように塩不足がいろいろな病気を作り出しているのです。

「現代病は塩が原因だった！」（泉書房）という本を書いておられる医学博士の真島真平先生は、悪いのは化学塩（塩化ナトリウム塩）であって、自然塩を摂ることが大切、と力説しておられます。

先生は、骨粗しょう症も、若者の無気力も、糖尿病も、少年たちのぶっち切れも、全て塩が真犯人だとしておられます。少年の〝キレ〟も塩を摂らせればミネラル・バランスが正常になり〝キレ〟など起こさないようになって正常になるのです。

こうしてみると塩がどれほど大切かが分かります。

塩が変わって病気が増えた

今、食堂などでよく使われている塩は「精製塩」と称せられる、かつての塩に比べて、さらさらしている塩です。これは塩と称されていますが、本当は塩化ナトリウムの純度が高い「化学塩」であって、本当の塩ではありません。

昭和46年、全ての製塩が「イオン交換法」と呼ばれる電気分解によって化学的に作られる方式に変わり、昔ながらの塩田による製塩は禁止されてしまったのです。ここから塩と呼ばれるものが、いろいろな病気の原因になることが分かって、医師たちに減塩が勧められるようになりました。

でも、この塩は昔ながらの塩ではないのです。化学塩で、化学塩は確かに摂りすぎるといろいろな病気を作り出していきます。でも、自然塩は人間にとっては偉大なパワーを与え、免疫力を付けてくれる大切なものなのです。

私たちは減塩が体に良いと思い込まされていますが、実は花粉症、アトピー性皮膚炎、喘息等々、昔ながらの塩を摂れば消えていくものなのです。イオン塩、化学塩が未だにはびこっていますが、それが悪いのです。塩もどきの化学塩と、自然塩とははっきり区別しましょう。自然塩は少々摂りすぎても体に害はないのです。

真島先生もボケる原因は塩にありとして、自然塩を摂っていた昔は、ボケ老人は少なかった、今で

はあちらでもこちらでもボケ老人だらけで、もっと塩を摂ることが大切と口をすっぱくして説いておられます。

参考文献

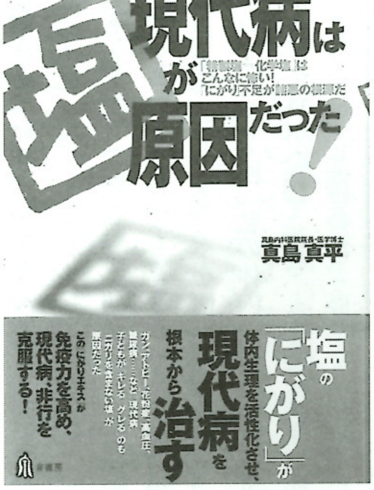
「現代病は塩が原因だった！」
真島　真平　泉書房

「塩と水の聖なる話」
八藤　真　青春出版社

「男性機能回復革命」
福迫　勝秀　土屋書店

「ルネ・カントンの海水療法　最強の免疫」
日下部喜代子　日本文芸社

「『塩』をしっかり摂れば、病気は治る」
石原　結實　経済界



「現代病は塩が原因だった！」
真島　真平／泉書房

右脳の話　2

右脳のパワーは強力

右脳は通常、意識しない脳、考えない非思考の脳です。その非思考の脳に驚くほどの秘められた力があるのです。人々は学ばなくてはいけないのは、この非思考の右脳の使い方です。

左脳は自分の意識、思考によって操作する脳ですが、非思考の右脳は感じる脳です。考える脳より感じる脳の方がはるかに働きが大きいのです。

非思考の右脳、感じる脳をいかに育てるか、が問題です。右脳は感じ取る力と同時に作り出す力があります。人間は誰もが内なる作り出す力、創造力を持っています。

人間は左脳の意識が働かない、ゼロ意識のときに最高に発揮できる力を秘めています。ゼロにすべてを生み出す力があるのです。ゼロ意識といえば、人間は一生のうち、胎児期が左脳の意識がゼロで、もっともゼロ意識の時代です。ということは、胎児こそゼロ意識の働きをもっとも純粋に発揮できる時期にあるのです。

ただ、胎児は自分が最高のゼロ意識パワーを持っていることなど知りません。親が言って聞かせると、その力を使って自分の障害などあれば、簡単に消してしまいます。いただいたお便りで、その様子を学びましょう。

―いつも七田式でお世話になっております。先日、まこと会（ハンディーのある子どもを育てる親の会）でおなかの赤ちゃんに卵巣腫瘍がある件で、七田眞先生と直接お話させていただきました。

あれから七田先生のおっしゃるとおり、おなかの赤ちゃんに、毎日「あなたは病気を自分で治せるすごい力があるのよ。だから、病気を消して元気で生まれてきてね。みんな、あなたのことを待ってるよ」と語りかけてきました。

その後、6月25日、無事安産で女児を出産しました。そして、驚くべきことに、2週間後の検査で、腫瘍が見当たらなくなっており、念のため、1か月後の再検査でも医者が不思議がるほどに、2～3センチあった腫瘍がなくなっていました。

これも七田式のおかげです。ますます赤ちゃんには未知なるパワーがあるのだと感じました。

右脳にはこのようなヒーリングパワーがあります。左脳の働きがゼロのとき、この右脳のヒーリングパワーは最高に働きます。赤ちゃんだけでなく、たとえ60過ぎ、70過ぎの年を召した方でも同じように強力に働きます。

新潟市の61歳の女性の方のケースをご紹介しましょう。

Sさんは、昨年の4月ごろから体調が悪くなり、食後必ず呼吸困難となり、顔色がチアノーゼ状態になり、胃痛を伴いました。

呼吸器の方を心配して検査しましたが、問題ないとのこと。でも8月ごろより食事が取れなくなり、体は痩せ細り、顔色は土気色となり、癌を心配して今度は胃カメラの検査を受けました。

一週間後の検査を控えて、CD音楽でも聴こうと選んでいたら、偶然一年ほど前に求めた七田眞の本を見つけ、付属のCDをなんとなく聞いていたら、その話の中にイメージトレーニングで病気を治した話がありました。(「超右脳人間塾」(三笠書房)

ひょっとしたら自分でもできるのではないかと考え、CDを何回も聞き、本を何回でも読んで、自分でも一日30分2回「私の体内の悪いものは全部老廃物となって体外へ出て行き、検査の結果、医師に悪いところなし、と言われ、喜んでスキップして帰るイメージ」をして検査日を迎えました。

するとなんと信じられないことに、イメージをした通りの結果がでたのです。「胃の粘膜が薄くなっている」といわれましたが、本当に嬉しくてスキップして車まで帰られたそうです。Sさんは、今でも朝夕の丹田呼吸とイメージトレーニングを続けておられるそうです。

病気を癒すイメージトレーニングは次のように行えばよいのです。

①瞑想(目を閉じて心を落ち着ける。約15秒)

②呼吸(8~10秒吐いて、8~10秒吸う。8~10秒息を止める)。これを何回でも繰り返す。(約30分)

③イメージ(息を止めたときに、病状がすっかり消えているイメージをする)

たったそれだけでよいのです。これを1日に数回毎日続けましょう。すると、1月もたたないうちに成果が見えます。

会員様からのお言葉

いつも楽しく通信を拝読しております。前回の「5つのチベット体操」については、大変興味を持ち、紹介された本も買って、以来ずっと続けています。

はじめは腹筋が痛くなりましたが、続けているうちに体も慣れてきました。姿勢がよくなってきて、体にいいという実感をもてるまでになりました。

ありがとうございました。

さて、途中で入会したので、創刊号と第6号、7号しか手元にありません。バックナンバーも欲しいのですがどうしたらよいでしょうか?

(事務局に申し出てください。1部200円でお分けしています。)

新潟県　O・Fさん

会報を大変興味深く拝読させていただいておりますが、私にとって未知の情報が多く、奥深さに感心しております。こうしたことにご縁をいただきましたこと、誠にありがたく、また楽しみにしております。

岐阜県　S・Tさん

いつも楽しく読んでいます。

白湯健康法を試してみたら、すごくお腹が調子よくなり、体がポカポカしてきて冷えが取れました。すごいです!こんな情報を入手できるのも、この会ならではですね。次回も期待しています。長生物語も面白いですね。

東京都　T・Oさん

お知らせ

「200歳まで生きる会」の会員数が100名を超えたことを記念して、「200歳まで生きる会」第1回記念講演会を平成19年3月21日(祝日)に、東京銀座ディアナサン、会議室にて行なうことになりました。会場の都合で参加者を50名に限定させていただきます。

当日の講演者は「200歳まで生きる会」会長　七田眞・副会長　首藤尚丈の二人です。申込順に受け付けさせていただきますので、お早めにお申込ください。

編集後記

新春1月号をお届けします。今年も皆様のお役に立つ記事をお届けしたいと、編集部では頑張っています。

ただ読んでいただくだけの記事ではなく、実践していただいて、実際の効果が出る、そういうお役に立つ情報をお届けするという姿勢で、今年一年も編集を続けさせていただきます。どうぞよろしく。(S)

【発行人】
七田　眞
【発行所】
「200歳まで生きる会」
〒695-0011　島根県江津市江津町527-5
☎0855-52-5301
FAX 0855-52-5797